

---

# キリスト教化と言語

—南米チキトス地方のイエズス会布教区における  
ジェンダー指標の用法から

金子 亜美 Ami Kaneko

宇都宮大学 University of Utsunomiya

---

本論文は、キリスト教化における言語の役割、およびそれが地域社会の言語使用にもたらす影響を扱うものである。17-18世紀のイエズス会布教区における南米先住民のキリスト教化を取り上げ、宣教活動を通じて在来の言語使用に生じた変容と、その長期的な帰結を考察することを目的とする。第I章では、指標性およびメタ語用に関する言語人類学の理論的観点を導入し、宣教活動を、言語における社会指標的意味の変容を通じて「キリスト教徒」なる人々を作り出そうとする試みとしてとらえ直す。第II章では、事例として扱うチキトス地方のイエズス会布教区の歴史と先行研究について述べる。第III章では、先住民言語チキタノ語に存在する「ジェンダー指標」の概要を確認した上で、その指標対象がイエズス会宣教師のメタ語用的モデルを通じて再編されていったことを論じる。第IV章では、今日チキタノ語が用いられる「説教」と「歌」を事例に、そこにおけるジェンダー指標の異なる用法が、発話自体をそれぞれ異なる二つの「キリスト教的」なものとして指標的に創出していることを示す。第V章では議論をまとめ、キリスト教化を経た地域社会を民族誌的に考察する上で社会指標的意味を担う記号やメタ語用に着目することがもつ意義を述べる。

[キリスト教化、言語、ジェンダー、指標性、メタ語用]

---

## I 序論

- 1 キリスト教化と言語
- 2 社会指標的意味への視座
- 3 メタ語用的モデルと社会指標的意味の変容

## II チキトス地方とイエズス会布教区

- 1 今日のチキトス地方
- 2 イエズス会布教区の創立と共通語政策
- 3 キリスト教化の歴史と現代

## III イエズス会布教区におけるジェンダー指標の位置付け

- 1 ジェンダー指標

## 2 文法書におけるジェンダー指標

- 3 告解と女性変種
- 4 文書と楽譜のジェンダー

## IV 今日のジェンダー指標

- 1 今日の言語状況とカビルドの言語使用
- 2 男性変種の説教
- 3 両変種による歌
- 4 説教と歌における差異のあり方

## V 結論

## I 序論

数世紀にわたる拡大を通じ、キリスト教は世界各地に信徒を獲得してきた。その一翼を担った主体として、各地で福音を伝道する宣教師が挙げられる。どの地域へ赴くのであれ、宣教師はつねに言語の問題に直面してきた。異なる言語を話す地域の人々にいかにして福音を伝えるのか。いかなる言葉遣いをすればその人々はキリスト教化したといえるのか。このような問いが繰り返し問われ、各宗派や修道会は地域ごとの対応を模索してきたのである。

本論文は、キリスト教化における言語の役割、およびそれが地域社会の言語使用にもたらす影響に光を当てる。17-18世紀に南米先住民のキリスト教化のためにカトリック系修道会イエズス会が設立した「布教区」を事例に、宣教活動を通じて在来の言語使用に生じた変容と、その長期的な帰結を考察することを目的とする。以下本章では、キリスト教化、およびそこにおける言語使用についての文化人類学的研究の系譜を概観し、言語人類学における指標性およびメタ語用の議論に本論文の事例を位置付ける。

### 1 キリスト教化と言語

文化人類学者にとって、キリスト教は注意を要する対象である。文化人類学者は世界各地のさまざまな宗教的なものを扱ってきたが、その研究は長らくキリスト教の「宗教」概念に制約を受けていた。例えば、世界宗教への改宗を扱う研究において、宗教が「世界の意味についての問いに答えてくれるもの」と前提された上で、改宗は社会地平の急速な拡大に応じた内面的なコミットメントの変化として論じられた [cf. Horton 1971; Hefner 1993]。しかしながら、そうした宗教観自体が啓蒙主義以降のキリスト教的な「信仰」および「個人」の概念を基礎としていることが指摘され [e.g. デュモン 1993; Sahlins 1996; アサド 2004]、一体いかなる活動をすれば「信仰」をしたことになるのか、また信仰の単位となる「個人」とは何かなど、近代ヨーロッパの学問を方向付けてきたキリスト教の概念自体を問う「キリスト教の人類学」と呼ばれる分野が登場した [cf. Cannel 2007]。

この分野の研究者がしばしば言語に着目してきたのは、キリスト教の布教者自身が言語に格別の関心を寄せる事実を考えれば自然なことである。宣教に用いる言語の選択は最たる例である。宣教師自身の言語ではなく現地語が選択される場合、イエス・キリストの弟子が精霊によって異教の言語で福音を伝える力を授かったとする使徒言行録第二章の記述がしばしば根拠となる [日本聖書協会 1987; cf. 齋藤 2002: 101]。また現地語が複数ある場合、いずれの言語を用いるべきかという問題も生じる。キリスト教宣教師は、こうした現地語による宣教や聖書の翻訳事業を通じて、諸言語の文法記述など多大なる学術的貢献を行ってきた [cf. Pennycook and Makoni 2005; Tomlinson and Engelke 2006]。

さらに、キリスト教徒にふさわしい言語使用とはいかなるものかという点にも宣教師は関心を寄せる。特にプロテスタント諸宗派は「語りの宗教」として知られ、礼拝での言語使用や祈りの方法、聖書の意味の解読法、聖職者の修辞技術などについて一家言をもっている [e.g. Crapanzano 2000; Harding 2000; Robbins 2004; Keane 2007; Schieffelin 2014]。ふさわしい言語使用に関するそうした構想の背景にはまた、各宗派や修道会に独自の言語観が通底している。例えばカトリック教会には典礼での言語使用に関する論争を繰り返してきた歴史があるが、16世紀のトリエント公会議では典礼での言語使用に伴う音楽表現が、神を讃える言葉の意味を掻き消すほどに甘美となることの是非が争点となるなど、言語は音楽的な側面との関係において思考されている [cf. 金子 2018]。

ここでキリスト教化と言語の問題を、言語人類学の指標性をめぐる議論に位置付けたい。

### 2 社会指標的意味への視座

前節で「世界の意味についての問いに答えるものとしての宗教観」や、「言葉の意味を掻き消す音楽」について述べたときに、筆者は「意味」という言葉を多義的に使ってきた。「キリスト教の人類学」の論者であるトムリンソン&エンゲルケは、「意味」という言葉がこのように多様に用いられ混乱を引き起こしてきたことを、先行研究に依拠しつつ指摘する [Tomlinson and Engelke

2006：1-2]。彼らは、従来の研究では神のメッセージや聖書の記述の解釈など、「外示的な意味 (denotational meaning)」に焦点が当てられてきたことを指摘し [Tomlinson and Engelke 2006：9]、その重要性を認めつつ、それ以外の意味も存在していること、そうしたさまざまな意味やその伝達不可能性、意味の不在にまで着目する方針を提示している。ここで「外示的な意味」やそれ以外の意味とは何かを、トムリンソン&エンゲルケも引用する言語人類学者シルヴァスティンの理論をもとに位置付けたい。

「外示的な意味」は辞書的な意味のことを言い、シルヴァスティンにおいてそれは、言及指示 (何について述べられているのか) と述定 (何が述べられているのか) からなるものとされる [シルヴァスティン 2009a：255]。言語使用の外示的な意味は言語使用者や研究者の意識に上りやすく、相互行為において中心的なものと考えられがちだが、「何について何が述べられているか」という「意味論」の領域に属す意味だけでなく、「何が為されているのか」という「語用論」の領域に属す意味も存在している。

例えば「私はあなたを洗礼する」という例を見てみよう。この発話で洗礼を授けている「私」が誰で、洗礼を受けている「あなた」が誰なのかということは、「私」「あなた」の辞書的な意味のみならず、実際の文脈でこの発話を行っているのが誰かを知ることなしに把握することはできない。このような代名詞をはじめとする、辞書の意味と文脈に結びついた意味の双方を備えた語を「転換子」と呼ぶ。そのように呼ばれるのは、この語の指示対象が文脈に応じて規則的に変わるからである [シルヴァスティン 2009a：270]。こうした文脈依存性を「指標性」と呼ぶ。シルヴァスティンにおける指標性はパース記号論の三分法 [パース 1986：31-56] を独自に展開させたもので、そこには実に多様な現象が含まれる。

転換子は辞書の意味と指標の意味の両方を備えているが、辞書の意味をもつことなく文脈を指標する記号もある。本論文でも扱う「ジェンダー指標」がその例である。ジェンダー指標とは、それを使用することによって話し手や聞き手の社会的ジェンダーが指標される記号のことである。例えば特定の一人称、二人称代名詞や特定の接辞を用

いることによって、文脈における話し手や聞き手のジェンダーが指標される一方で、それらを用いることで発話の辞書の意味が変わるわけではない [シルヴァスティン 2009a：287]。

これら指標記号には、文脈を前提として生起する側面と、生起した結果として文脈を創出する側面がある [シルヴァスティン 2009a：283-285]。自身を男性と考える人物が、使用の規則に応じて男性と結びついたジェンダー指標を用いる場合は、彼のジェンダーという社会的属性が前提的に指標されている。他方で、使用の規則に反してジェンダー指標を用いることもできる。その場合、ジェンダーに関する既存の枠組みから自己を差異化したり、異議申し立てを行うという効果が創出される [Ochs 1992：341-345]。このように、文脈に応じて前提的、創出的に意味される「発話出来事の参加者の人格、ペルソナ、アイデンティティ、権力関係の特徴」[シルヴァスティン 2009a：279]などを、本論文では「社会指標の意味」と呼ぶ。

社会指標の意味へと視座を広げると、「キリスト教徒」という属性も、文脈を前提し、また文脈を創出する言語使用の動態のなかで理解できるようになる。改宗を内面的なコミットメントの変更としてとらえる場合、「内面」の析出のために改宗者の言明に依拠する必要があるが、社会指標の意味を含む言語使用という経験的な素材に着目することで、言語使用者自身が必ずしも意識化したり言明しない面を含めた分析ができる利点がある。さらに社会指標の意味の視座からすれば、キリスト教宣教とは、いかなる言語使用を「キリスト教徒」という属性を指標するものとみなすのかという、メタ的、再帰的な構想を含むものとなる。

### 3 メタ語用的モデルと社会指標の意味の変容

「キリスト教の人類学」の論者がしばしば言語に関心を寄せ、諸宗派において言語使用がいかに構想されているかを探究してきたことは既に述べた。彼らが行ってきたのは、言語人類学的に言えば、キリスト教布教者および改宗者が言語使用 (語用) に対してメタ的、再帰的に行う明示的、非明示的な言語使用、つまりメタ語用の研究だったと言うことができる。

言語使用者は、語用、すなわち文脈に即した社会指標的な意味を含む実際の言語使用に対し

て、メタ的に枠組みを与えたり、それを統制したり、規定したりするような、「メタ語用」的と呼ぶべき言語使用を行っている〔シルヴァスティン 2009c : 483〕。シルヴァスティンは、メタ語用的な記号が含まれる出来事 (Es) と、それによって構造化される出来事 (Et) を区別し、二種類の言語使用の間の指標的關係 (「較正」) のあり方を三種類に分類している。第一の「再帰的較正」では、今ここの文脈で生じる出来事が出来事自体を再帰的に指標する。第二は「時空内的較正」で、今ここで生じる出来事が異なる時空間において生じる／生じた同型の出来事を指標する。第三は「超時空的較正」で、今ここの出来事が存在論的に異なる (異界的な) 領域を指標する〔シルヴァスティン 2009c : 518-529〕。

このような異なる較正のあり方をもつメタ語用にも、さまざまな水準の例が存在する。ここではキリスト教宣教に特に関わるものとして、社会指標的な意味をもつ言語使用に対して言語使用者が再帰的に行う、意識的、合目的モデルを見てみたい。例えばバウマンによれば、初期プロテスタント一派のクエーカー教徒は、凝った修辞の施された演説を神の言葉を歪めるものとし、意図した以上の内容を伝えない平明な言語使用を推奨した〔Bauman 1983〕。またキーンも、インドネシアのカルヴァン派においては、内面の思考と発話行為を曖昧さのない仕方で一致させる「言行一致」の規範が重視されていることを指摘する〔Keane 2007〕。キリスト教と結びつく社会的属性を前提的、創出的に指標する言語使用についてのこのような言語使用を、メタ語用的モデルと考えることができる。

この意味で宣教活動とは、言語使用の社会指標性について特定のメタ語用的モデルをもつ人々が、他者に対してそのような言語使用を行うよう要請すること、そうすることを通じてひいては、他者の社会的属性を「キリスト教徒」へと変更させることを目指す取り組みといえる。例えば「言行一致」の規範に従う言語使用を繰り返すことで、自己とは異なる対象に何らかの効果を及ぼすことのできる行為主体としてのプロテスタントの「個人」を創出することが目指される〔cf. Keane 2007〕。

ところで、世界各地へ赴く宣教師は、しばしば

メタ語用的モデルを共有しない人々に対して宣教を行うことになる。その際宣教師は、宣教に現地語を用いるか否かにかかわらず、現地に既に存在する社会指標的な意味を含む言語使用とも当然向き合わなければならない。そうしたとき宣教師は、他者の在来の言語使用を、しばしば自身の利害関心や言語観などの理解の枠組みを通じてメタ語用的に意識化して考察し使用するのだが、その際実態を合理化した解釈が生じることがある〔シルヴァスティン 2009b : 330-332〕。合理化した解釈とは、言語使用のうち音素や単語など、比較的意識に上りやすい言語の特徴に焦点を当てて、その社会指標性を歪曲して理解することを言う。これがあるために、言語使用者によるメタ語用的モデルが実際の言語現象を正しくすべて説明しないということが起こる。

アーヴァイン&ガルは、言語使用者が自らのメタ語用的なモデルに従って他者の言語使用に向かい合うとき、「類像化 (iconization)」、「反復複製 (recursiveness)」、「消去 (erasure)」という三つの記号論的過程が生じることを指摘した。「類像化」とは、ある言語使用とある社会的属性の指標的な関係に対して、必然性や内在性、本質性が付与される過程である。例えば特定の地域変種は、話者の出身地や居住地という社会的属性との間の関係を歴史的、偶発的、慣習的に指標するにすぎないのだが、言語使用者は社会的属性をそのような言語使用の原因としてとらえ、両者の関係を本質主義的に理解する場合がある。「反復複製」とは、例えば言語使用に対する「文明的」と「未開的」などのメタ語用的な対比が、集団間関係など別の次元の対比へと投影され複製されることを言う。「消去」とは、自身のメタ語用的解釈に適合しない言語使用が不可視化されたり、解釈に適合するように翻訳して理解される過程である〔Irvine and Gal 2000 : 37-39〕。いずれも言語使用者の、言語使用とその社会指標性に関する意識的、合目的なモデル化の結果であり、この過程を通じて、言語使用と社会的属性の間の既存の指標的な関係がしばしば変容にさらされる。

本論文では、17-18世紀、南米大陸のイエズス会布教区でのキリスト教化において言語がいかなる役割を果たし、それがいかなる帰結を招いているのかを考察する。イエズス会士は、先住民言語

にもともと存在していた男性変種と女性変種からなる「ジェンダー指標」という言語的特徴とその社会指標の意味を、宣教師としての利害関心の枠組みに即してメタ語的に理解し、利用した。結果としてジェンダー指標は指標対象を変化させていったのだが、その変遷が今日のキリスト教儀礼における言語使用に興味深い形であらわれている。

以下、第Ⅱ章では事例として取り上げるチキトス地方の概要と歴史、先行研究について述べる。第Ⅲ章では、チキトス地方の先住民言語における「ジェンダー指標」の特徴を記述し、それが布教区時代にいかなる扱いを受けたのかを検討する。第Ⅳ章では、先住民言語が用いられる今日の「説教」および「歌」という言語使用に焦点を当て、そこにおけるジェンダー指標の用いられ方の差異が、いかにして布教区時代に生じた指標対象の変容を反映しつつ、発話自体の性格を構造化しているのかを論じる。第Ⅴ章では議論をまとめ結論を述べる。

## Ⅱ チキトス地方とイエズス会布教区

### 1 今日のチキトス地方

チキトス地方は南米大陸のほぼ中心、今日のボリビア東部低地にある広大な地域で、一部の集落はブラジル西部にまで広がる。熱帯雨林のアマゾンと乾燥地帯のチャコの間であり、およそ5月から10月にかけての乾季と、11月から4月にかけての雨季に分かれる。

筆者は2014年2月から2016年1月にかけて、ボリビアのサンタ・クルス県ベラスコ郡にあるサン・イグナシオ市とその農村部にあるサンタ・アナ村で民族誌的調査を、また2020年現在までに南米諸国とスペインで史料調査を行った。2012年の国勢調査によれば、サン・イグナシオ市の都市部と農村部をあわせて、ボリビアを構成するとされる36民族のうちチキタノと称する人々が33,209人居住しており、この人々が本論文で記述される主な対象である [INE 2012]。当地で日常的に話されているのはスペイン語だが、同じ国勢調査では307人が第一言語として先住民言語チキタノ語（イエズス会時代の呼称はチキト語）を挙げている<sup>1)</sup>。

ところで、チキトス地方という名称は今日の行政上の区分とは一致しないが、それはこの名称が

植民地時代のイエズス会布教区にルーツをもつためである。そこで名称の成立および布教区創立の歴史を概観する。

### 2 イエズス会布教区の創立と共通語政策

1550年代、ニューフロ・デ・チャベス率いる探検隊がパンタナル湿地帯以西を探查した折、他先住民集団から「タプイ・ミリ」と呼ばれていた集団と接触した。先住民言語グアラニ語で「取るにたならぬ奴隷」という意味の他称であり、これが「チキトス」というスペイン語に翻訳された。チキトスとは、スペイン語で男性複数形の形容詞 *chiquitos* を名詞的に用いたもので、「小さき人々」という意味である [cf. Martínez 2018]。一集団の他称にすぎなかったこの語は、「チキト」のかたちで四つの地域変種を含む彼らの言語を指すためにも用いられるようになり、さらにパラグアイ川上流域を示す地名にもなった。

1561年には当地の交易の拠点として都市サンタ・クルス・デ・ラ・シエラが設立され、1587年には最初のイエズス会士も入植している。しかし主な交易路であったパラグアイ川の兩岸を好戦的な先住民が取り囲んでいたこともあり、この都市は1621年までに約250キロメートル西方へと移され、現ボリビアのサンタ・クルス県庁所在地となった。このときからチキトス地方は、ほぼ1世紀にわたって植民地政府から忘却されることになる [Combès 2010]。その間西方の新サンタ・クルス・デ・ラ・シエラからはスペイン人が、東方からはポルトガル人が、絶えず労働力や資源、領土拡大を求めてチキトス地方を侵略しており、その影響で疫病の蔓延、人口減少、侵略者による交易の阻害に起因する食糧不足が続いた。

こうした状況下の1690年、チキト語系諸集団の代表者がサンタ・クルス・デ・ラ・シエラ総督に謁見し、彼らを保護してくれる宣教師の派遣を求めた。この要請はポルトガル領との国境警備に当地の先住民を動員したい植民地行政の思惑とも一致し、イエズス会パラグアイ管区から宣教師が派遣されることになった [Tomichá Charupá 2002]。こうして1691年から80年弱の間に、チキトス地方には10箇所「布教区」と呼ばれる空間が建設された。辺境地域の先住民を布教区に集住させ、そこでキリスト教の布教を行うという修道会に委

囁かれたこの体制のことを「ミッション」と呼ぶ。ミッションはスペインによる公式の植民地事業の一つであり、とりわけ17世紀以降アメリカ大陸の辺境政策として重要な役割を担った。ペルー副王フランシスコ・デ・トレドのもとで大規模に行われた先住民の集住化政策のモデルを踏襲しつつも [Saito and Rosas Lauro 2017]、ミッションは植民地行政の意思決定から比較的自律した体制でもあった。辺境地域にある各布教区で暮らすイエズス会士は原則二名ずつで、彼らが先住民の宗教生活のみならず、世俗面でもあらゆる責任を負った。

言語状況について言えば、16世紀後半以降のスペイン領南米植民地において、キリスト教宣教師は原則現地語で宣教を行うことが義務付けられていた [齋藤 2002 : 101]。しかしながらミッションが行われるような地域では、「現地語」が多数存在する状況が宣教師を待ち受けていた。チキトス地方の多言語状況についても、1707年にイエズス会宣教師フェルナンデスが次のように報告している。「宣教師の情熱を挫き、脅かす最たるものは、これほどまでの言語的多様性なのです。これらの村を一步進むごとに、周りのどの集団とも随分異なる言語を話す100家族程度の集落に突き当たるのですから」 [Fernández 1726 (2004) : 36]。

そこでイエズス会士は、多数の地域変種を擁し、チキトス地方に居住する集団の間で比較的広く用いられていたチキト語のタオ地域変種を布教区の共通語とした。宣教師の講話や人々の祈りなど宗教的な場面はもちろんのこと、共同体の農作業などでもチキト語を使用することが義務付けられ、その習得を効率化する外婚は奨励された。周辺の異教徒を受け入れつつ拡大を続けたため布教区の多言語状況は継続したが、チキト語以外の諸語が使用される領域は徐々に減少していった。

ミッションの体制は、1767年スペイン王室によるイエズス会の追放をもって終了するが、その時点でチキト語は既に共通語として、そして多くの人々の「母語」として確立していたという [Riester 1967 : 174]。その後他の地域では廃墟となった布教区も多いなかで、チキトス地方ではすべての布教区が今日まで存続し、一部の旧布教区は教会建築物などとともに1990年にユネス

コの世界遺産に登録されている。今日、チキトス地方の住人の多くもカトリック教徒としての生活を送り、自らの宗教的アイデンティティの根源をイエズス会布教区時代に位置付けつつ語り、行為する。サン・イグナシオ市やサンタ・アナ村を含むサン・イグナシオ・デ・ベラスコ司教区について言えば、2014年の調査時点でカトリック教徒は人口の89.9%を占めていた [Vatican Publishing House 2014 : 649]。

### 3 キリスト教化の歴史と現代

チキトス地方の先住民に関しては、これまで数名の文化人類学者による民族誌的研究がなされている。それらは、今日の人々が行う「キリスト教的」な語りや行為のなかに覆い隠された、「土着的」なものを発見してきた。その一人であるシウヴァは、ブラジルのチキタノ集落における「キリスト教的」な語りや行為、例えば旧約聖書の出来事に言及した神話や洗礼の所作、聖人像の扱い、謝肉祭のコミュニタス的性格などを例に、チキトス地方の人々が受け入れたのはキリスト教の形式的な部分にすぎず、むしろアマゾニア先住民に通じる神話的思考が継続していることを示している [Silva 2015]。

土着的なるものの連続性を強調するこうした議論のもとにあるのは、神話素の構造上の対立など、本論文で言うところの意味論的な意味に対する共時的な分析である。既に見てきたように、意味論的な側面は生起する出来事のうちごく限られた領域にすぎず、その分析のみではキリスト教化が先住民社会にもたらした通時的な影響を評価することは難しい。それに対してキリスト教化を言語使用の語用論的な側面にも働きかけるものとしてとらえる本論文では、特に先住民言語の「ジェンダー指標」という言語使用の社会指標の意味が、布教区での宣教活動を通じて変容したことに着目する。その長期的な帰結を追うことで、従来とは異なるキリスト教化後の先住民社会像が見えてくる。すなわち、布教区時代のキリスト教化の歴史が、現代の人々がカトリック教徒として行う語りや行為の根幹を重要な仕方形成しているということを、本論文では示していきたい。また本論文では、あらゆる語りや行為に内在する「土着的」なものと「キリスト教的」なものを見出そうとし

てきた先行研究に対し、語りや行為自体が「土着的」ないし「キリスト教的」なものとして自らを生起させる動態を問うアプローチを提起する。

ここで章を改め、イエズス会宣教師がとりわけ興味深いメタ語用的モデル化を行ったチキト語の言語的特徴、「ジェンダー指標」を概観した後、それが宣教師によっていかに解釈され、布教区で利用されていたのかを検討する。

### Ⅲ イエズス会布教区におけるジェンダー指標の位置付け

#### 1 ジェンダー指標

一般的に言って、言語にはジェンダーを区別する形式が二つある。第一に、言及指示や述定の対象となっている人や物のジェンダーを区別するもので、これを「名詞句のジェンダー分類」と呼ぶ〔シルヴァスティン 2009b : 333〕。例えば日本語で「少年／少女」という語彙の違いによって指示対象のジェンダーが区別されるのがその例で、いずれの語彙も話し手や聞き手のジェンダーとは関わりがない。

他方で第二の形式は「ジェンダー指標」で、話し手や聞き手など会話参加者のジェンダーが指標される〔シルヴァスティン 2009b : 334〕。特定の一人称、二人称代名詞や接辞の使用がその例である。チキト語では、超自然的存在や自然現象、人間、男性という名詞クラスに入る三人称単数および複数形の対象、およびその所有物が、非引用文を発話する男性話者によって有標化される〔Rose 2015 ; Fleming 2012, 2015〕。

布教区時代にチキト語の研究に尽力し、アメリカ大陸からの追放後に自身の知見を著した宣教師カマニョの文法書から例を見てみよう（表1）。例えばチキト語では「男性」という指示対象について、話者のジェンダーに応じた二通りの言い方がある。すなわち、男性話者であれば“*ñoñeis*”、

女性話者であれば“*oñeis*”と言う<sup>2)</sup>。ここでは、「男性」というチキト語の「男性」名詞クラスの対象に対して、男性という社会的属性をもつ話し手のみが接頭辞による有標化を行っている。同様に、「スペイン人」や「悪魔」にも有標化が見られるのは、スペイン人という語が「人間」、悪魔という語が「超自然的存在」名詞クラスに入るためである。

上記の特徴は、超自然的存在や自然現象、人間、男性という名詞クラスに入る三人称の対象の所有物にも該当する。表1の「彼の家」では、三人称の男性の所有物である名詞“*ipoos*”（家）を、男性変種のみが“-*tii*”という接尾辞で有標化している。それに対し「彼女の家」では、“*ipoos*”は三人称の女性の所有物であるため、いずれの変種においても有標化されない。

#### 2 文法書におけるジェンダー指標

このように、チキト語にもともと存在するジェンダー指標は、男性変種の使用が男性話者を、女性変種の使用が女性話者を指標しているのだが、イエズス会士はこの指標的な関係をどのようにメタ語的に理解したのだろうか。

引き続きカマニョの文法書を見ていこう。発音の規則について論じた後、彼はラテン語と異なる特徴として、「チキト語では一般的に、女性たちは男性たちと異なる言語を話す」点を挙げている<sup>4)</sup>。

次のように考えてみてください。語形変化しうるすべての名詞、代名詞、動詞、前置詞、形容詞が（三人称について話さなければならないときに）、一方では男性のと呼ぶことのできる屈折を、他方では女性のと呼ぶことのできる屈折を、それぞれ単数形および複数形でもっているのだと。〔……〕さて女性は、男性が話した

表1 チキト語のジェンダー指標<sup>3)</sup>

指示対象	男性変種	女性変種
男性	“ <i>ñoñeis</i> ”	“ <i>oñeis</i> ”
スペイン人	“ <i>ixaras</i> ”	“ <i>xaras</i> ”
悪魔	“ <i>oichobores</i> ”	“ <i>ichobores</i> ”
彼の家	“ <i>ipoostii</i> ”	“ <i>ipoos</i> ”
彼女の家	“ <i>ipoos</i> ”	“ <i>ipoos</i> ”

ことやフレーズに言及するとき以外は、男性の屈折変化を使うことは決してできません。逆に男性は、単数形にせよ複数形にせよ、いずれの屈折変化も使うことができます。ただし、次のような違いがあります。男性の屈折変化は、神、ないし聖なる人物や天使、悪魔、男性、偽の神々など、つまるところ画家が男性の姿で描くすべてのものについて話す時にだけ使われるのです。そしてもし女性や女性たち、その他のものについて話すときは男性の屈折変化は用いられず、女性の屈折変化が用いられます。この〔女性の〕屈折変化は、女性が話したことや節に言及するときにも使います（たとえ彼女が神や天使、悪魔、男性について話していたのだとしても）。なぜならそうしたときに言われているのは女性にふさわしい言葉なのであって、それは先にも述べたように、女性の屈折変化だからです<sup>5)</sup>。

下線で強調された上記の特徴は宣教師らの目を引いたようで、別の人物によってイエズス会追放後の1829年までに書かれた文法書でも詳しく解説されている。他方で、同じ文法書の名詞の屈折変化を解説する項目では、男性変種で用いられる "-iii" という接尾辞を外すことによって女性変種を作ることができるという理由で、これ以降女性変種の例は省略すると述べられる [Falkinger and Tomichá Charupá (eds.) 2012 : f. 7-8]。

言語学者ファルキンガーは、男性変種と女性変種の相違は三人称の単数形よりも複数形においてより複雑であることを指摘し、女性変種の屈折変化が割愛されていることに疑義を呈する [Falkinger 1993 : 35]。ファルキンガーはカマニョによる別の文法書に見られる次の記述を検討し、特定の名詞クラスを区別する男性話者とそれらを「混同する」女性話者が対比的に考えられていたことを指摘する。

チキト語において男性が行う性の区別という困難さと、男ことばおよび女ことばの違いという困難さを誤解して混乱すべきではありません。この二つの困難さはそれぞれの性質によって互いに大きく異なっており、別々に考えられねばなりません。性質が異なるというのは、次

の理由によります。まず性の区別による困難さは、各名詞や代名詞、動詞を、文において言及されている人や物の質や性と一致させることによって、男ことばを正しく統制するうえでのものです。それに対して男ことばと女ことばの違いによる困難さは、性を混同してしまう女性たちを理解するために、また彼女たちの会話を真似たり引用したりしながら彼女たちについて直接話さなければならない時に、女ことばを模倣するうえでのものです [Adam and Henry (eds.) 1880 : 7 ; スペイン語の原文から日本語訳]。

ここにおいて文法記述者は、男性変種を特定の名詞クラス（文法上の「性」）を区別するものとして、それに対して女性変種を、それら名詞クラス（文法上の「性」）を「混同する」ものとして言及している。ファルキンガーはこの記述を検討し、「神について語る」男性変種が布教区で「規範」として優遇されたと考察している [Falkinger 2002 : 45]。

言語使用のうちいずれの特徴に着目しがちであるかは、言語使用者自身のメタ語用的枠組みに大きく依存する [Choksi and Meek 2016]。司牧活動のために各地に赴く宣教師は、しばしば在来の信仰との対比でキリスト教の布教を推進しようとするが、チキトス地方におけるジェンダー指標への注目はその一例と言える。文法記述者が男性変種を「神、ないし聖なる人物や天使、悪魔、男性、偽の神々など [……]」を区別するものとして強調するとき、彼が特に神格や超自然的存在の有標化に注目していることがわかる。ここにおいて上記の記述は、それ自体、文法記述者のメタ語用的モデルがいかなるものであるかを指標する二階レベルの指標記号となる。

ファルキンガー自身は言語人類学の議論を参照していないものの、福音伝道という利害関心をもつイエズス会士が「神を区別する能力」という社会的属性を男性変種という言語使用の原因とみなしたのであれば、そのような本質主義的な解釈はアーヴァイン&ガルが言うところの「類像化」の例と言える。そして、男性変種／女性変種がそれぞれ指標的に結びついていた男性話者／女性話者という対比は、神を区別する能力／その欠如という対比へと「反復複製」されたことになる。さ



らに、女性変種を文法上の性を「混同」しているとし、文法的に区別する能力を認めない文法記述者の評価は、「消去」の例とすることができる [Irvine and Gal 2000 : 58]。なぜなら女性話者は、超自然的存在名詞クラスを文法的に有標化せずとも、神について話すことができるからである。

それでは、上記のようなメタ語用的モデル化を通じて、男性変種と女性変種は布教区で実際どのように用いられるようになったのだろうか。

### 3 告解と女性変種

上記の文法書の引用箇所あとは、男性である宣教師に対して女性変種が引き起こす混乱について述べられる。

これら [「男性が行う文法上の性の区別」と「男女の言語の違い」という] 二つの困難は、性質を異にするだけでなく、互いに混乱を引き起こすものです。私は既に性を区別することや男性性に属するものを男性の屈折で、女性性に属するものを女性の屈折で話すことに慣れましたが、それでも女性の屈折を耳にした後には、女性存在について話しているのだとつい思ってしまうし、彼女たちは男性存在について女ことばでしゃべっているのだと思出すことに苦労するのです [Adam and Henry (eds.) 1880 : 8 ; スペイン語の原文から日本語訳、亀甲括弧は引用者]。

上記の混乱は、布教区での宗教生活において次のような実際上の困難につながっていた。

[男女の間の] この言語の違いが、最初は少なからぬ困難を引き起こすことは疑いようがありません。ある宣教師は、男性たちの告解を聞くことをある期間練習したあとでも、女性たちの告解を聞くために座ることをいまだしばしば拒絶するのです。というのも、(彼女たちとの付き合いがないので) 彼女たちの言語に耳を慣らしておらず、言っていることを理解できないのではないかと、いみじくもおそれているからです<sup>6)</sup>。

告解とは、カトリック教会で信徒に授与される

七つの秘跡のうちの一つで、自身の罪を聖職者に告白することによって神の許しを得ることとされる。それぞれの信徒は生涯のうちで告解を頻繁に行うことが期待されており、布教区時代、特にクリスマスや聖週間など教会暦の重要な日の前には告解を希望する信徒が増加した。

その告解において、男性変種と女性変種の差異が聖職者に制約を課した。「彼女たちとの付き合いがないので」という一節は、宣教師が原則異性との接触を規制されていたことと関係がある [Falkinger 2002 : 45]。なお、宣教師の便宜のために告解での想定問答例を記した資料も残されており、そこには両変種での例文が記されている<sup>7)</sup>。それは宣教師が両変種に対応しようとしていた痕跡を示しているものの、いずれにせよ頻回であることが求められる告解の秘跡において、聖職者が女性変種を遠ざける傾向があったという上記の記述を軽視はできない。

### 4 文書と楽譜のジェンダー

チキト語の男性変種は、アルファベット化および文法記述の主な対象となることを通じて、文書に記される言語ともなった。例えば宣教師が典礼の最中に説教壇から単独で行うキリスト教徒としての生き方についての発話、「講話」をとどめた史料は男性変種で書かれている<sup>8)</sup>。これは、宣教師が男性であることを考えれば当然である。しかしながら特筆に値するのは、布教区時代に典礼で男女ともに歌われていた音楽の楽譜写本も、歌詞がラテン語やスペイン語でなくチキト語である場合、やはり男性変種で書かれている点である<sup>9)</sup>。もっとも、宣教師は合唱におけるジェンダー指標の用法について考えを表明しておらず、実際に女性たちが楽譜に従い男性変種で歌っていたのか、楽譜にかかわらず女性変種で歌っていたのかを史料から知ることはできない。いずれにせよ、こうした文書や楽譜を生産していたのは、文字や楽譜の読み書きを学んだマエストロ・デ・カピージャという役職を担う先住民男性であったことは、のちの議論のために指摘しておく必要がある。

キリスト教典礼におけるジェンダーの役割を考える上で、歌と楽譜は興味深い対象である。もともと先住民社会において、歌はジェンダー化された活動であった。イエズス会宣教師クノグラは、

音楽を伴う土着の踊りについて報告している。

村のまんなかにある広場に、6～7名の若者か男たちのグループがいくつも集まり、女たちは観衆となります。これらグループのそれぞれが輪になり、その中心にパンフルートなどの楽器を手にした男が立ちます。[……]そして輪になったほかの者たちは旋律を口ずさみます。[……] このリズムに合わせて足で地面を踏み鳴らしながら、彼らは広場を横切り、村の通りを進んでゆくのです [Knogler n.d. (1979) : 159 ; スペイン語の原文から日本語訳]。

これに対し女性の歌は、同じくチキトス地方の布教区へ編入されたマナシと呼ばれる言語集団についての記述に見られる。この集団では、先住民祭司マポノが土着の神々を召喚し託宣を行うのだが、「私たちの母」とも呼ばれる女神キボシがやってくる時に女性のみが歌っているのがわかる。

この女神がマポノを腕に抱いて降りてくると、[……] 彼女は甘美な声で歌い始めます。先住民女性は女神の歌の音律に合わせて踊り、同じ歌を繰り返します。男たちは座ったままです。女神の歌は [……] 神々の言葉なのでみなはそれをよく理解できませんが、本質的には戦争や敵への勝利を歌っているようです [Caballero 1706 (1933) : 26-27 ; スペイン語の原文から日本語訳]。

イエズス会宣教師がここにもち込んだのは、複数の声部を重ね合わせる合唱という形態だった。チキトス地方では1972年以降、5,000頁におよぶ布教区時代の典礼で用いられていた楽譜手稿が発見されているのだが、ここにおいて従来別々に歌っていた男女が、五線譜の上で共存しているのが見てとれる。つまり楽譜においては、男女という差異が、ソプラノ、アルト、テノール、バスという声部の差異へと再編成されているのである。

音楽学者ワイズマンによれば、チキトス地方でイエズス会宣教師が作曲した音楽は技巧をほとんど必要としない簡素な様式をもち、多くの場合4声か5声の合唱と、ヴァイオリンおよび通奏低音

から成る。興味深いことに、いずれの声部も、他から個別化されるソロとしての個性をもたないという [Waisman 1991 : 47]。というのも異なる声部同士が同一音程やオクターブ（完全8度音程）でたびたび進行しており、旋律を重ねる声部があったとしてもそれは和声に変化を与え音楽を先へと進めることに資するものにすぎないからである。ワイズマンは、このような音楽構造が布教区という空間に対するイエズス会の理念と一致していたと論じる [Waisman 1991 : 52-53]。すなわちポリスをモデルとする布教区では、すべての構成員が全体の調和のためにそれぞれの役割を分業して果たす。布教区には鍛冶屋や左官、各種職人や音楽家などの専門職があり、現実はともかくとして、自給自足的な経済を確立することが理想とされた。そこにおいて各々の個人は、先に述べた声部と同様、差別化された存在というより代替可能な役割を担う没个性的な全体の一部となる。

こうして布教区での歌という活動において、人はジェンダーというより、全体の一部としての声部の差異によって特徴付けられる歌い手として理念化された。典礼音楽の文脈においてジェンダーの差異が後景化したからこそ、「規範」となった男性変種が書かれたのだとも考えられる。しかも先住民男性は低音域を発声することがなかったことから、男声は通常よりオクターブ高く記載されているとの指摘もあり [Loza de Guggisberg 2006]、楽譜通りなら身体的な差異にもとづく鳴り響きの上でさえジェンダーの別は希薄になったと言える。

まとめよう。チキト語の男性変種／女性変種は、それぞれ男性／女性を社会的に指標する在来の言語使用であった。イエズス会士はこの指標的な関係を、キリスト教化という自身の利害にもとづきメタ語用的にモデル化した結果、両変種を、神を含む名詞クラスを区別する能力／その能力の欠如という社会的属性の結果ととらえた。また、実際のキリスト教典礼での活動において、両者の使用方法を大きく差異化させた。すなわち、男性変種は宣教師が単独で行う講話の言語となり、文法書や講話集、楽譜といった文書に記された。それに対して女性変種は告解において敬遠され、多くの文書類から割愛された。特にジェンダーという差異が後景化した典礼音楽の楽譜において、歌詞とし

て記されたのは男性変種であった。

以上のようにして、布教区での宗教生活を通じ、チキト語のジェンダー指標に話者のジェンダーとは異なる社会指標の意味が付与されていった。それでは「規範」とならなかった女性変種は、典礼の領域から実際に排除されていくのだろうか。この問題を考察するために、以下では今日観察される二つの言語使用を取り上げ、そこでジェンダー指標が用いられる異なる仕方を見ていく。

## IV 今日のジェンダー指標

### 1 今日の言語状況とカビルドの言語使用

1767年のイエズス会追放後、チキトス地方は植民地行政および教区のシステムに編入された。1825年の独立以降のポリビア共和国時代の間、チキトス地方の先住民は、当地の農牧畜業や資源開発に関わるヨーロッパ系や混血系の移民による搾取の対象となる。言語状況について重要なのは、1955年の教育改革以降、国民国家の統合を創出する上でスペイン語識字教育の重要性が認められ、チキトス地方でも公的教育において先住民言語の使用が禁止されたことである。これ以降チキタノ語の第一言語話者人口は減少傾向となる。この傾向に対し、1990年代以降のポリビアでは、異文化間教育をめぐる国際的な風潮のなか、先住民言語教育の法整備がなされるようになるとともに、初の先住民大統領の就任や「ポリビア多民族国」への改称を期に、先住民の権利復興の機運が高まっている。チキトス地方でも先住民組織を中心としたカリキュラムの策定が行われ、筆者が調査を行った2010年代半ば現在では、児童生徒や一般労働者を対象としたチキタノ語教育が行われている。

こうした学校教育や第一言語話者の日常会話以外で、今日のサン・イグナシオ市とサンタ・アナ村においてチキタノ語が聞かれる主な機会として、カトリック教会関連行事に「カビルド」と呼ばれる典礼組織が行う言語使用が挙げられる。カビルドとは、もともとスペイン領植民地時代に先住民市参事会として各地に設置された組織であり、チキトス地方でも布教区時代には行政や司法、宗教的な機能などを担っていた。それに対し今日のカビルドは、主日ミサや教会暦の祝祭日、守護聖人祭など教会の行事に組織として参列するなど、

もっぱら宗教的な活動を行う。行事に参列する人数は時期によって異なり、男女合わせて15名程度から、重要な祝祭日にかけて40名程度まで上下するが、固定した役職を担う人々は主日ミサにほとんど毎週参列する。主な役職には、首長にあたるカシケヤ、スペイン語で「説教 (*sermón*)」と呼ばれる発話を行うシンディコ、そして説教と「歌 (*canto*)」の演奏を担当するマエストロ・デ・カピージャなどが含まれ、後述するように昨今状況は変わりつつあるものの、これまで基本的には男性によって担われてきた。

以下本論文では、これら教会暦の重要な機会にカビルドの人々が行う説教と歌に焦点を当てる。この二つの言語使用は、いずれもイエズス会布教区時代にルーツをもつものとして人々自身によって語られている。

### 2 男性変種の説教

「説教」とは、今日カトリック教会の祝祭日や守護聖人祭に行われるチキタノ語の発話である。聖職者がミサの最中に行う発話も同じスペイン語の名称で呼ばれることがあるが、本論文では聖職者の発話を「講話」と呼んでいる。説教は、イエズス会時代にミサで宣教師の講話を聞いた各先住民集団の首長が、ミサのあとにその内容を街角で述べ伝えたことに端を発すると言われる [Tomichá Charupá 2002 : 469-470 ; Strack 1992 : 26, 29]。

なお、チキトス地方の先住民における神話的思考を論じたシウヴァの研究でも、説教は言及されている。それは「チキタノのコスモロジーと対話しており、それゆえにまた、儀礼的な仕方で語られた先住民神話学の一つの型」であるとされる。しかし同時に、説教だけでは「謝肉祭の、そしてその儀礼複合の全体を分析するには不十分」とも言われる [Silva 2015 : 156 ; 傍点は引用者]。以下では、シウヴァが「儀礼的な仕方」としか言及しなかった説教の語用論的な側面に注目し、人々が行う「儀礼複合」がいかにして「キリスト教的」なものとして生起しえているのかを記述する。

引き続き説教の特徴を見ていこう。それぞれの行事では、行われるべき説教が決まっている。サン・イグナシオ市やサンタ・アナ村において説教は、手書きのノートなどの文書を参照してなされ

る場合が多い。これらの文書類は布教区時代から連綿と複製されてきた遺産と考えられており、言語学者ファルキンガーと現地の人々が協力してドキュメンテーション・プロジェクトを行い、書籍 *Anauxti Jesucristo Mariaboka: manual de sermones* (『イエス・キリストがたたえられますように、諸賢よ——説教の手引き』) [Falkinger (ed.) 2010] として出版したことがある。説教のスク립トの大部分はチキタノ語だが、神学概念や聖人名など一部スペイン語やラテン語も含まれる。

既に述べたように、説教を行うのは原則、カビルドでシンディコとマエストロ・デ・カピージャを務める人物である。いずれも長らく男性のみが担ってきた役職だが、昨今ではチキタノ話者人口の減少や男女平等をめぐる国内外の風潮を受け、女性がその役割を担う場合もある。説教を行う人をスペイン語で「説教師 (*sermonero; sermonera*)」と呼ぶ。

説教が行われる日、ミサが終わると説教師は教会のポーチで首長から杖を受け取り、発話を行う権限を得る。杖に口づけをすると、説教が始まる。発話1はその例である。

説教はまず、1行目の決まり文句と、それに対する会衆のアーメン唱から始まる。2行目には会衆への呼びかけがあり、神とサン・イグナシオ市の守護聖人である聖イグナティウス・デ・ロヨラへの感謝が述べられる。この部分で言及される聖書の出来事や聖人名は機会によって異なる。説教は3分程度のものから、20分を超えるものまである。日常会話とは異なる抑揚で話され、その様子は「歌うように朗読される」[Arce (ed.) 2008: 75] と言われる。11行目は決まり文句で、説教師がアーメン唱と聖家族名を述べると説教は終了と

なり、まわりで聞いていた会衆が説教師に握手を求めにゆく。そして説教師の家へと移動し、説教師はトウモロコシの発酵飲料を会衆にふるまう。

ところで、発話1の説教のスク립トはチキタノ語の男性変種で書かれているが、それは説教の話者が男性であることを示すわけではない現状にある。既に述べたように昨今では女性が説教師になる場合があり、その際でも男性変種で発話が行われるからである。

例えば人口500人程度のサンタ・アナ村では、昨今壮年男性の都市への流出が進み、カビルドの人員が慢性的に不足している。そのためこの村では、筆者の調査時点で既に3年間にわたり、かつての説教師の娘であるサンタという名の30歳代後半の女性に説教を委嘱してきた。そのジェンダーに従えばサンタはチキタノ語の女性変種で発話するのではと考えられるが、しかし彼女は男性変種で書かれた説教を男性変種のまま発話したのである。

サンタが説教を行う際に参照したのは、先に言及した言語学者ファルキンガーが監修して手書きのノートを活字化した書籍、*Anauxti Jesucristo Mariaboka: manual de sermones* である。ファルキンガーによる序文では、女性が説教を行う場合の手続きが次のように注釈されている。

今日、女性も男性と同様の権利を有しているので、カビルドで役職を務めることもできますし、もし説教をしたければすることができます。しかし、説教は男性話法で書かれていることを考慮する必要があります。それをふさわしい形式に翻訳しなければならぬでしょう。なぜなら、女性が男性のように話していると滑稽になって

#### 発話1 サン・イグナシオ市守護聖人祭、「ミサのあとの説教」(2014年7月31日の説教より)

- |   |  |
|---|--|
| 1. <i>Anauxtii Kesucristo. [Amen.]</i>                                | 1. イエス・キリストがたたえられますように。[会衆：アーメン]             |
| 2. <i>Chamoxima haume, mariaboka, tsatika ichakimokokaityo.</i>       | 2. よきことがあなたがたを満たしますように。諸賢、息子たち、そして娘たちも。      |
| 3. <i>Chapie imotii Tupax yachikixtii nomixhiña apaetso naneneka.</i> | 3. 神に感謝します。私たちにこの上なくよき日々をもたらしてくれる神に。         |
| 4. <i>imo nanaukusti Patron Santo Saninacio de Loyola.</i>            | 4. そして守護聖人聖イグナティウス・デ・ロヨラを敬います。               |
| 5. <i>Tusaki bachesoi ikiñana noxiñati Santo Sacrificio</i>           | 5. 私たちはご聖体のもとに跪き、                            |
| 6. <i>imo nanaukusti Patron Santo Saninacio.</i>                      | 6. 守護聖人聖イグナティウス・デ・ロヨラを崇拝しています。               |
| 7. <i>Aucutsa nanenes maikiyo nigraciasti Tupax,</i>                  | 7. 今日というこの日に、神の慈悲を乞います、                      |
| 8. <i>asorobo takisiri rausipi,</i>                                   | 8. 私たちの魂の苦しみを見守ってくれますように、                    |
| 9. <i>ñaana yebarache tariotii Patron Saninacio,</i>                  | 9. 守護聖人聖イグナティウス・デ・ロヨラが私たちと共にあり、              |
| 10. <i>aiiasuroti oñi oroti imo takinunau esati Tupax ape.</i>        | 10. いと高き所におおす至高なる神のもとへと永遠に、私たちと共に行ってくださいように。 |
| 11. <i>Amen Kesus Maria Kose.</i>                                     | 11. アーメン、イエス、マリア、そしてヨセフ。                     |

まいりますから [Falkinger (ed.) 2010 : 20 ; スペイン語の原文から日本語訳]。

サンタの第一言語はスペイン語で、彼女はこの説教を行うにあたりチキタノ話者である父母の指導を受けている。その際彼らが、上記の注釈に反して女性変種への翻訳を行わなかった理由として、サンタの母親は「昔の、昔ながらの説教に従っていかなければならないのです。直すことはできません。なぜなら、大昔からそうやってきたのですから」と筆者に語った。

ここで、女性による男性変種の説教に対する周囲のメタ語用的評価を見てみよう。説教は長らく男性の占有物であったことから、女性に説教を行う権限を委譲することに拒絶を示す人はいる [e.g. Silva 2015 : 61]。例えばサン・イグナシオ市のマエストロ・デ・カピージャは、サンタ・アナ村で女性が説教を行った事実に驚き抵抗感を示した上で、「代理の説教師が話すのであれば、本来の説教師がする仕方ではなければならない。だから男性変種だったのは当然のことだ」と筆者に語った。またサンタ・アナ村では説教を男性の占有物にしておきたい考えはもはや目立たず、この点に関しては、「滑稽さ」を認識できるほどチキタノ語に習熟した話者人口が減少してしまった現状への嘆きが集中した。つまるところ、説教を行う話者のジェンダーと変種の不一致を問題視する声は聞かれなかったのである。

女性による男性変種の説教が目立つのは、「説教」と対で語られるもう一つの言語使用「歌」においては両方の変種が聞かれるためである。この両者を合わせて検討することで、男性変種と女性変種が使用される仕方の偏差が、両発話自体を異なるものとして再帰的に構造化している様相を理解することができる。

### 3 両変種による歌

「歌」は、マエストロ・デ・カピージャによって先導される音楽である。マエストロ・デ・カピージャがヴァイオリンを演奏しながら単旋律で歌うのに合わせ、太鼓奏者がリズムを刻む。それ以外の会衆は、マエストロ・デ・カピージャが歌った一節を単旋律で繰り返す。布教区時代のような声部の差も、今日ではない。また歌においては、先導者も会衆も楽譜を参照しない。筆者が第Ⅲ章で言及した楽譜は、今日学術利用のため、旧布教区であるコンセプション市の「チキトス音楽文書館」に保管されているものである。歌も説教と同様、場面によってレパートリーが固定している。歌詞は宗教的なものがほとんどだが、讃美される聖人の名は祝祭日によって変わる。発話2は、主日ミサのあとで全員が無原罪の御宿り像に向かって歌う《*Anauxtiña*》（「讃えられますように」）の歌詞である。

歌詞のジェンダー指標に関して言えば、説教では話者のジェンダーにかかわらず男性変種が発話されていたのに対し、歌においてはマエストロ・デ・カピージャが男性変種で歌う一節に続き、周りにいるそれぞれのジェンダーの会衆が同じ旋律を、自身のジェンダーに応じた変種の歌詞で繰り返す。例えば発話2の3行目の単語 *aigo*（御子）などから変種の違いを確認することができる。

こうした場において女性変種で歌っているのは、チキタノ語を第一言語とする主に65歳以上の高齢女性である<sup>10)</sup>。この世代の人々は、1950年代以降のスペイン語教育と先住民言語に対する抑圧の状況を生きてきた。特に女性の多くは読み書き能力へのアクセスを制限されており、説教師の男性のように文書を通じて詞章を継承してきたわけではない。先に見たとおり、布教区時代の典礼音楽において、ジェンダーの差異は声部の差異へと再編成されたこと、そして楽譜の歌詞が男性変種

発話2 《*Anauxtiña*》の歌詞の一部（2014年9月28日の演奏より。下線部が男性変種）

男性変種	女性変種	訳
1. <i>Anauxtiña santísimo sacramento iku naxtar.</i> <u><i>Naki anatii iku naxtar.</i></u>	1. <i>Anauxtiña santísimo sacramento iku naxtar.</i> <i>Na ne iku naxtar.</i>	1. ご聖体が讃えられますように 聖壇におわします
2. <i>Aito Virgen Santa María.</i> <i>Niñemoko noxiña, noxiña anenetii.</i>	2. <i>Aito Virgen Santa María.</i> <i>Niñemoko noxiña, noxiña anene.</i>	2. 聖母マリアの息子は 全ての始まりに存在しました
3. <i>Kicheseña onimo, onimo aigotii.</i> <i>Inikosinitaña oi nanti tikañi...</i>	3. <i>Kicheseña onimo onimo aigo.</i> <i>Inikosinitaña oi nanti tikani...</i>	3. 神の御子の潔白は 全ての前に存在しました [...]

でのみ書かれていたことを思い起こせば、今日の歌が両方の変種で歌われている事実はなおさら興味深く思われる。二つの言語使用においてジェンダー指標が異なる仕方で行われるというこの事実を、いかに理解したらよいのか。

#### 4 説教と歌における差異のあり方

既に見てきたように、説教と歌は対照的な発話の形式を有している。説教では男性変種のみが用いられるのに対し、歌では両方の変種が用いられる。説教は単独の話者が会衆の前に進み出て行うのに対し、歌はマエストロ・デ・カピージャに続き複数人の会衆が集合的な歌い手となる。また説教では布教区時代から継承されてきたとされる文書が参照されるのに対し、歌において楽譜は参照されない。この差異によって、それぞれの発話は発話自体の性格を異なる仕方で構造化していることを以下では述べていく。

今日説教で使用される男性変種は、発話者のジェンダーを再帰的に較正する指標とはなっていない。そのことは、女性説教師が男性変種で説教をしたとき、ジェンダーと変種の一致を問題にするメタ語用的な言及が見られなかったことから明らかである。ここで女性説教師の母が「昔の、昔ながらの説教に従っていかなければならないのです。直すことはできません。なぜなら、大昔からそうやってきたのですから」と語ったことを思い起こしてほしい。説教は、話者自身のジェンダーという「今ここ」の文脈よりも、それが「大昔から」行われてきた発話の一例であることを喚起するものとなっている。「大昔」とは、説教のドキュメンテーションを監修した言語学者ファルキンガーや現地の人々自身によって、連綿と継承されてきた手書きのノートの出処として考えられているイエズス会布教区時代である。説教を文書と結びついた男性変種で行うことで、説教師は、自身のジェンダーにかかわらず、説教壇の宣教師や街角の首長が公の場で単独で行った過去の発話を指標する時空間的較正によって、その文脈を今ここに再現している。男性変種による説教は、布教区時代の講話と同型の出来事として生起することで、発話者と会衆の間に社会的な差異を創出することができる。そのことは説教師が、杖を手に前へ進み出て、「よきことがあなたがたを満たしま

すように。諸賢、息子たち、そして娘たちも」という聞き手への呼びかけによって、神と聞き手である会衆の間に立つ自らの立場に言及していることからわかる。

他方で歌においても、ジェンダー指標の使用は発話者の社会的ジェンダーを再帰的に較正してはいないが、そのあり方は説教とは異なる。歌においては、むしろ発話者の間の社会的差異が顕著に後退する。まず、説教において布教区時代という過去を指標することで説教師と会衆の間に社会的差異を創出していた「男性変種と結びついた文書」も、今日の歌においては用いられない。また、説教師が杖を手に前へ進み出て自らを会衆から差異化していたのと対照的に、歌においてマエストロ・デ・カピージャと歌い手は並び立ち皆聖人像の方を向いている。歌詞も一貫して一人称複数形の「私たち」を主語とし、発話者の一人ひとはマエストロ・デ・カピージャという先導者に同じ資格で続く歌い手となる。この空間において、それぞれの歌い手が各々の変種で歌うことも、発話者の間の差異を希薄化させることに寄与する。なぜなら男性変種と女性変種が声を合わせて歌われると、言葉が混じり合い、全体としていずれともつかない響きが生み出されるからである。発話者の間の差異を傑出させないこれら歌の特徴は、歌そのものを再帰的に、すべての信徒へ平等に開かれた発話の場として成立させている。男性変種と女性変種の双方が用いられることでかえって社会的差異が後退するというのは、ジェンダー指標の本来の機能を思い起こせば、ある意味逆説的に思えるかもしれない。しかし、メタ語用的な機能を発話形式や鳴り響きといった非言語面にまで拡張することで初めて見えるようになるこの逆説が、布教区時代に生じたジェンダー指標の指標的意味の再編成がもつ影響の奥行きを伝えているのである。

#### V 結論

本論文は、キリスト教化における言語の役割、およびそれが地域社会の言語使用にもたらす影響への関心を背景とし、17-18世紀にイエズス会布教区でのキリスト教化を経験した南米先住民社会を舞台に、宣教活動を通じて在来の言語使用に生じた変容と、その長期的な帰結を考察してきた。第I章では、指標性およびメタ語用に関する言語

人類学の理論的観点を取り入れることで、宣教活動を、社会指標の意味をもつ言語使用の変容を通じて「キリスト教徒」なる人々を作り出そうとする試みとしてとらえ直した。第Ⅱ章では、チキトス地方のイエズス会布教区の歴史と先行研究について述べた。第Ⅲ章では、先住民言語チキト語に存在するジェンダー指標の指標対象が、イエズス会布教区において再編されていったことを論じた。まずジェンダー指標の概要を確認した上で、それが文法記述者によっていかにメタ語的に解釈され、新たな指標対象を付与された上で、実際の宗教生活でいかに用いられたのかを検討した。その結果「神について語る」男性変種が典礼における言語使用の「規範」となっていったことを、告解と聖歌を事例に確認した。第Ⅳ章では、今日チキタノ語が用いられる「説教」と「歌」を事例に、ジェンダー指標が用いられる異なる仕方を取り上げた。すなわち、説教では話者のジェンダーにかかわらず男性変種が、歌では両方の変種が用いられていた。こうした説教と歌におけるジェンダー指標の用い方の差異は、それぞれ異なる仕方で、発話自体の性格を再帰的に指標していた。説教においては、文書と結びついた男性変種の使用が布教区時代の宣教師や首長の発話を指標し、公の場で単独で発話を行う人物として発話者自身を差異化していた。反対に歌においては、両方の変種が入り混じり混交した響きを創り出して歌うことが、聖人像に向き合う歌い手の姿勢や歌詞での一人称複数形の使用と相まって、発話者の間に神の前における平等な関係性を創出していた。両方の変種が用いられることで社会的差異がかえって後景化することは、ジェンダー指標の本来の定義からすれば一見矛盾に思われるかもしれない。しかし、音の鳴り響きなど非言語的な側面もメタ語用的機能をもつものにとらえることで、布教区時代におけるジェンダー指標の指標的意味の再編がもたらした長期的なインパクトがいつそう可視的となる。この分析は、必ずしも言及指示や述定などの機能をもたない非言及指示的な記号やプロソディなどをも分析対象としてきた言語人類学の射程を、音楽的な側面を含むものへとさらに拡張する可能性を示すものである。

チキトス地方の先住民に関する先行研究では、「キリスト教的」に見える語りや行為の意味論的

な意味に隠された「先住民的」な思考が示されてきた。それに対して本論文は、人々の行為の語用論的な側面から、布教区時代のキリスト教化が先住民社会の言語使用にもたらした長期的な影響を明らかにした。ここで筆者は、押しつけられた「キリスト教的」なものの圧倒的な影響力を主張しているわけではないことを述べておきたい。本論文が示してきたのは、布教区時代に新たな指標の意味を帯びるようになったジェンダー指標が、今日「説教」および「歌」という二つの言語使用を、それぞれ異なる「キリスト教的」な発話として、自ら再帰的に構造化する様相であった。このアプローチは、キリスト教化を経験した地域社会において、「キリスト教的」なものと「先住民的」なものを研究者の側で指定することなく、文脈のなかで生起し、それによって「キリスト教的」あるいは「先住民的」な文脈を創出する相互行為の動態をとらえるものなのである。

## 謝辞

本論文のもととなった調査に対して、日本学術振興会(16J00174、19K13455)、松下幸之助記念財団、澁澤民族学振興基金の助成を受けた。また本論文の執筆にあたり、特集の寄稿者、匿名の査読者、編集委員の方々から貴重なご助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

## 注

- 1) チキタノ語(チキト語)は、今日のボリビア多民族国憲法においては「ベシロ語」と表記されている[Estado Plurinacional de Bolivia 2009]。
- 2) 本論文でのチキタノ語の表記については、引用元がある場合はその表記を踏襲し“ ”で綴じる。特に引用すべき典拠がない場合は、1995年に正書法として設定されたものを利用する[cf. Sans 2009]。
- 3) 未刊史料Gramatica Chiquita y Guaraní, Biblioteka Jagiellońska [以下BJと略記], Berol. Ms. Coll. ling. fol. 23 : f. 5-6をもとに筆者作成。
- 4) BJ, Berol. Ms. Coll. ling. fol. 23 : f. 3.
- 5) BJ, Berol. Ms. Coll. ling. fol. 23 : f. 4 ; スペイン語の原文から日本語訳。丸括弧と下線は原著者、亀甲括弧は引用者。
- 6) BJ, Berol. Ms. Coll. ling. fol. 23 : f. 4-5 ; スペイン語の原文から日本語訳。丸括弧は原著者、亀甲括弧は引用者。

- 7) 未刊史料Liturgia, confesionario y catecismo para uso de los jesuitas en las misiones de los indios chiquitos de Concepción y San Miguel [Manuscrito], Biblioteca Nacional de España [以下BNEと略記], Mss/20612 : f. 12-35.
- 8) BNE, Mss/20612 : f. 36-44.
- 9) 未刊史料Música Vocal en Chiquitano, Archivo Musical de Chiquitos, CH01-28.
- 10) 厳密に言えば世代間の差は民族誌的に重要な問題で、2014年以降学校教育でチキタノ語を習う生徒は男女問わず男性変種で歌う場合もある。これについては別の機会に扱った [Kaneko 2016]。

## 参考文献

Adam, Lucién and Victor Henry (eds.)

1880 *Arte y vocabulario de la lengua chiquita: con algunos textos traducidos y explicados, compuestos sobre manuscritos inéditos del XVIII siglo*. Libraire-Editeur J. Maisonneuve.

Arce, Ana Luisa (ed.)

2008 *Fiesta patronal de Santa Ana de Velasco: ayer y hoy*. Fondo editorial APAC.

アサド、タラル

2004 『宗教の系譜——キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』中村圭志訳、岩波書店。

Bauman, Richard

1983 *Let Your Words Be Few: Symbolism of Speaking and Silence among Seventeenth-Century Quakers*. Cambridge University Press.

Caballero, Lucas

1706 (1933) *Relación de las costumbres y religión de los indios Manasicas*. Manuel Serrano Sanz (ed.). Librería general de Victoriano Suárez.

Cannel, Fanella

2007 Introduction: The Anthropology of Christianity. In *The Anthropology of Christianity*. Fanella Cannel (ed.), pp. 1–50. Duke University Press.

Choksi, Nishaant and Barbra A. Meek

2016 Theorizing Saliency: Orthographic Practice and the Enfigurement of Minority Languages. In *Awareness and Control in Sociolinguistic Research*. Anna M. Babel (ed.), pp.228–252. Cambridge University Press.

Combès, Isabelle

2010 *Diccionario étnico: Santa Cruz la Vieja y su entorno en el siglo XVI*. Editorial Itinerarios.

Crapanzano, Vincent

2000 *Serving the Word: Literalism in America from the Pulpit to the Bench*. The New Press.

デュモン、ルイ

1993 『個人主義論考——近代イデオロギーについての人類学的展望』渡辺公三、浅野房一訳、言叢社。

Estado Plurinacional de Bolivia

2009 *Constitución política del Estado Plurinacional de Bolivia*. Ministerio de la Presidencia.

Falkinger, Sieglinde

1993 *Historia y situación actual de la lengua chiquitana*. Manuscrito inédito.

2002 Diferencias entre el lenguaje de hombres y mujeres en chiquitano (besiro). *Indigenous Languages of Latin America* 3 : 43–55.

Falkinger, Sieglinde (ed.)

2010 *Anauxti Jesucristo Mariaboka: manual de sermones*. APAC.

Falkinger, Sieglinde and Roberto Tomichá Charupá (eds.)

2012 *Gramática y vocabulario de los Chiquitos (S. XVIII)*, (Gramática de la Lengua de los Yndios llamados Chiquitos Pertencientes al Gobierno de Chuquisaca En el Reyno del Perú Doctrinados por los PP. de la Extinta Compañía de Jesus De la Provincia Del Paraguay, Biblioteca Estence de Módena), Editorial Itinerarios.

Fernández, Juan Patricio

1726 (2004) *Relación histórica de las misiones de los indios que llaman Chiquitos*. Universidad Privada de Santa Cruz de la Sierra.

Fleming, Luke

2012 Gender Indexicality in the Native Americas: Contributions to the Typology of Social Indexicality. *Language in Society* 41 (3) : 295–320.

2015 Speaker-Referent Gender Indexicality. *Language in Society* 44 (3) : 425–434.

Harding, Susan Friend

2000 *The Book of Jerry Falwell: Fundamentalist Language and Politics*. Princeton University Press.

Hefner, Robert W.

1993 Introduction: World Building and the Rationality of Conversion. In *Conversion to*



- Christianity: Historical and Anthropological Perspectives on a Great Transformation*. Robert W. Hefner (ed.), pp.3-44. University of California Press.
- Horton, Robin  
1971 African Conversion. *Africa* 41 (2) : 85-108.
- Instituto Nacional de Estadística (INE)  
2012 *Características de población y vivienda. Censo nacional de población y vivienda 2012*. Estado Plurinacional de Bolivia.
- Irvine, Judith and Susan Gal  
2000 Language Ideology and Linguistic Differentiation. In *Regimes of Language: Ideologies, Politics, and Identities*. Paul V. Kroskrity (ed.), pp.35-84. School of American Research Press.
- Kaneko, Ami  
2016 Diferencia de habla entre hombre y mujer: transformación del significado metapragmático sobre la indicialidad de género en el idioma chiquitano. *Actas de las XVI jornadas internacionales sobre las misiones jesuíticas*. Salinas, María Laura and Fátima Victoria Valenzuela (eds.), pp.132-149. Resistencia: Instituto de investigación geohistóricas.
- 金子 亜美  
2018 『宣教と改宗——南米先住民とイエズス会の交流史』風響社。
- Keane, Webb  
2007 *Christian Moderns: Freedom and Fetish in the Mission Encounter*. University of California Press.
- Knogler, Julián  
n.d. (1979) Relato sobre el país y la nación de los Chiquitos. In *Las Misiones jesuíticas entre los Chiquitos*. Werner Hoffmann (ed.), pp.121-185. Fundación para la educación, la ciencia y la cultura.
- Loza de Guggisberg, Roxana  
2006 En busca de una estética originaria: La Misa Encarnación del Archivo Musical de Chiquitos. *Acta Musicologica* 78 (2) : 235-260.
- Martínez, Cecilia  
2018 *Una ethnohistoria de Chiquitos: más allá del horizonte jesuítico*. Editorial Itinerarios.
- 日本聖書協会  
1987 『聖書 新共同訳』日本聖書協会。
- パース、チャールズ・サンダース  
1986 『パース著作集2——記号学』内田種臣(編)、勁草書房。
- Ochs, Elinor  
1992 Indexing Gender. In *Rethinking Context: Language as an Interactive Phenomenon*. Alessandro Duranti and Charles Goodwin (eds.), pp.335-358. Cambridge University Press.
- Pennycook, Alastair and Sinfree Makoni  
2005 The Modern Mission: The Language Effects of Christianity. *Journal of Language, Identity, and Education* 4 (2) : 137-155.
- Riester, Jürgen  
1967 El habla popular del oriente boliviano: el Chiquito. *Revista de Antropología* 15/16 : 171-195.
- Robbins, Joel  
2004 *Becoming Sinners: Christianity and Moral Torment in a Papua New Guinea Society*. University of California Press.
- Rose, Françoise  
2015 On Male and Female Speech and More: Categorical Gender Indexicality in Indigenous South American Languages. *International Journal of American Linguistics* 81 (4) : 495-537.
- Sahlins, Marshall  
1996 The Sadness of Sweetness: The Native Anthropology of Western Cosmology. *Current Anthropology* 37 (3) : 395-428.
- 齋藤 晃  
2002 「福音の言語——新大陸におけるイエズス会の言語政策」『福音と文明化の人類学的研究(国立民族学博物館調査報告No.31)』杉本良男(編)、pp.99-134、国立民族学博物館。
- Saito, Akira and Claudia Rosas Lauro  
2017 Introducción: reduciendo lo irreductible. En *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú*. Akira Saito and Claudia Rosas Lauro (eds.), pp.11-64. Perú Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo editorial, National Museum of Ethnology.
- Sans, Pierric  
2009 *Éléments de sociolinguistique du bésiro (chiquitano): approche bibliographique et approche de terrain d'une langue en danger de Bolivie*. Mémoire de Master, Université

- lumière Lyon.
- Schieffelin, Bambi B.  
 2014 Christianizing Language and the Displacement of Culture in Bosavi, Papua New Guinea. *Current Anthropology* 55 (10) : S226-S237.
- Silva, Verone Cristina da  
 2015 Carnaval, alegria dos imortais: ritual, pessoa e cosmologia entre os Chiquitano no Brasil. Tese apresentada ao Programa de Pós-Graduação em Antropologia Social da Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas da Universidade de São Paulo.
- シルヴァスティン、マイケル  
 2009a「転換子、言語範疇、そして文化記述」榎本剛士、古山宣洋、小山亘、永井那和訳、『記号の思想——現代言語人類学の一軌跡』小山亘（編）、pp.235-315、三元社。  
 2009b「言語、そしてジェンダーの文化——構造、語用、イデオロギーが交叉する場で」榎本剛士、小山亘、永井那和訳、『記号の思想——現代言語人類学の一軌跡』小山亘（編）、pp.317-391、三元社。  
 2009c「メタ語用的ディスコースとメタ語用的機能」榎本剛士、小山亘、永井那和訳、『記号の思想——現代言語人類学の一軌跡』小山亘（編）、pp.473-537、三元社。
- Strack, Peter  
 1992 *Frente a dios y los pozokas: las tradiciones culturales y sociales de las reducciones jesuíticas desde la conquista hasta el presente; fiesta patronal y Semana Santa en Chiquitos*. Verlag für Regionalgeschichte.
- Tomichá Charupá, Roberto  
 2002 *La primera evangelización en las reducciones de Chiquitos, Bolivia (1691-1767): protagonistas y metodología misional*. Editorial Verbo Divino.
- Tomlinson, Matt and Matthew Engelke  
 2006 Meaning, Anthropology, Christianity. In *The Limits of Meaning: Case Studies in the Anthropology of Christianity*. Matt Tomlinson and Matthew Engelke (eds.), pp.1-37. Berghahn Books.
- Vatican Publishing House  
 2014 *Annuario Pontificio per l'anno (2014)*. Vatican Publishing House.
- Waisman, Leonardo  
 1991 Música misional y estructura ideológica en Chiquitos (Bolivia). *Revista musical chilena* 45 (176) : 43-56.

(2019年12月13日採択決定)

---

# Christianization and Language

A Linguistic Anthropological Analysis on Gender Indexicality in  
the Jesuit Missions of Chiquitos, South America

Ami Kaneko

[Christianization, language, gender, indexicality, metapragmatics]

This paper addresses the role of language in missionary activities and their impact on local societies in the aftermath of Christianization. In the first section, articulating linguistic anthropological perspectives on indexicality and metapragmatics, I reframe missionary activities as attempts to implant certain patterns of language use considered to embody Christianity among non-Christian people, which often result in changes in local verbal behaviors. The second section introduces the ethnographic outline of the case study: Christianization of the indigenous population in the South American Jesuit missions during 17–18th centuries. The third section details the “genderlect” of native Chiquito language, which consists of male and female varieties, and explains how the Jesuits metapragmatically conceptualized and differentiated their usages in missionary activities. The fourth section discusses the consequences of the aforementioned transformation of indexical meanings of genderlect, with a particular focus on two different contemporary speeches in Chiquito language: *sermón* and *canto*. I demonstrate how the difference in the uses of varieties in *sermón* and *canto* reflexively indexes the “Christian” nature of each speech.